

## 生徒の実地調査による都市研究 2 例

渡 辺 英 郎\*

### 函館市の温度分布

函館市の温度観測調査は1961年（昭和36）12月1日19時に実施した。調査者は函館中部高等学校生徒と函館市内の深堀，旭，港，船見の中学校生徒合計300人である。観測場所は街頭にたつ電柱に温度計をつりさげて，屋外の気温を一斉に観測した。観測にあたり標準温度計を定め，これに合わせた温度計を各学校に1本ずつおいて，観測する生徒の持っている温度計の誤差を確かめておいた。観測記録は記録用紙に記入させた。

観測目的：都市内部の気温はその都市の活動と密接な関係をもっているといわれるところから，函館市の気温のようすを把握するための定点観測

における個人の役割がいかなるものであるのかを体験する。

観測地点：観測地点は全市域に及ぶのが望ましいのだが，函館中部高等学校は学区制になっているために生徒の居住地域だけでは市域の一部分に偏ってしまうので，観測に協力してくれる中学校の社会科教師のいる中学校の生徒に協力してもらった。

観測結果：観測カードは300枚であったが函館山ふもとに広がる西部地区は観測カードに不備な点が多かったので，この地区だけは除外した。したがって有効カードは220枚である。これを1万2千5百分の1の市街地図におとして等値図を作成した。

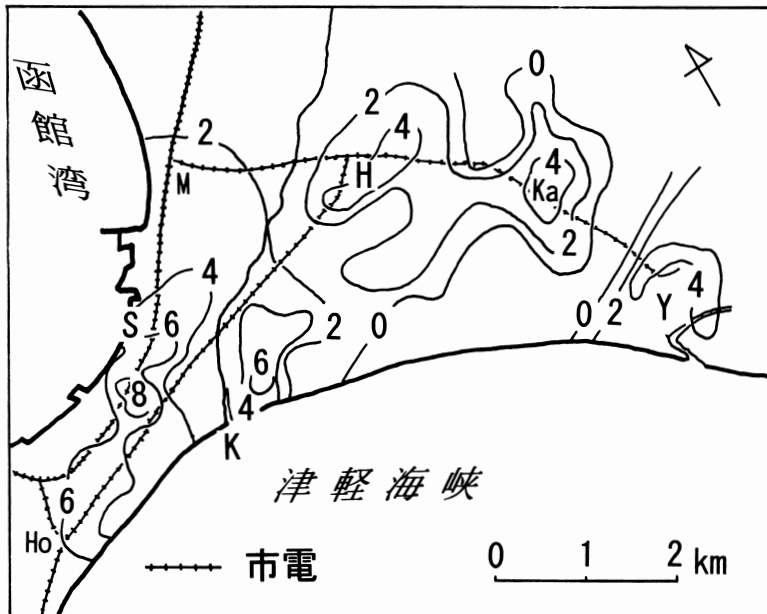


図 函館市内の等温線分布図

調査年月 1991年12月1日19時， 単位 摂氏 度。

Ho 蓬萊町，S 函館駅，M 万代町，K 亀田川，H 本町，Ka 柏木町，Y 湯の川温泉，

\* 函館大学商学部（非）

## 結果と考察

結果は函館市の気温分布図のようになった。これから読み取れることは、最高気温は11度、最低気温は零下2度で、13度の温度差がある。国鉄函館駅から蓬萊町にかけての都心を含む地域が高温地域である。これに次ぐのは亀田川左岸の宇賀浦町から堀川町地区。本町から柏木町地区。湯の川温泉地区で、温度分布からみて5ブロックの存在を指摘できる。また、これらの5地区内には共通して商業地区をふくんでいることがわかる。商業地区と住宅地区では、建物が密集し、連担している商業地区のほうが住宅地区よりも高くなっている。住宅地区でも家屋の密集の程度で温度差が認められる。家屋が密集している地区は家屋がまばらな地区よりも高い傾向がうかがえる。亀田川の流路が気温の谷になっている。

都市における気温分布の要因を分析するには、住宅地の建物の構造、住宅地の微地形、観測日の大気の流れの方向なども併せて調べる必要がある。また、こうした観測は継続しておこなわれなければならない。

## 結論

この調査は中学生の協力が得られたおかげでまとめることができた。筆者が市内の社会科研究会で中学教師に相談したことがきっかけとなった。中学生にたいする指導は中学校の教師が担当してくれた。無効の観測カードが多数でたことは数名の指導者によっておこなわれる場合の問題点を示しているようにおもわれる。かかる調査は同一市内の高等学校生徒の共同研究として取り上げられることがのぞましい。地理教師の日頃の相互の交流がのぞまれるのはこのような指導を実現させるためでもある。

なお、図は読売新聞昭和37年2月9日函館版に掲載されたものである。

## 札幌市の間代分布

これは筆者が札幌南高等学校で生徒を指導しておこなった地理の野外調査である。最近おこなった調査ではなく歴史的な資料である。調査人数は300人に及ぶかなりおおがかりな共同調査である。

調査結果は明瞭になると思われるので紹介する。

調査した当時の1960年代はわが国の住宅事情は今日ではとても想像できないほどの住宅不足であった。公営住宅の建設はようやく緒についたばかりで、都市の住宅事情は極端に悪かった。一戸建ての貸家は少なくなかったので、一間か二間の部屋貸し(当時は間貸しといった)が一般的であった。このころ札幌市の人口は1年間に約5万人ずつ増加しており、これが家賃、間代(間貸しの代金)にはねかえってきていた。人口増加の影響にたいする世間の感心は強く、アパートの賃貸料や間代に興味を持つ生徒も多かった。

調査時期：1964年3月～5月

調査者：札幌南高等学校1年生300人

調査目的：部屋代から住宅地の地域差を考察する。

調査方法：賃貸の貸し間およびアパートの賃貸料を入居者から聴取し、調査カードに記入した。

調査対象：調査対象としたのはモルタル構造で水道を完備している部屋である。

調査内容：調査地点の住所と部屋の広さと賃貸料。

有効調査カード：230枚

調査結果は札幌市の間代分布図のようになった。

作図は1畳あたりの賃貸料を求め、それを1万4千分の1札幌市街図におとして等間代線図を作成した。

## 考察

畳1畳あたりの値段をもとに4つの地域に区分して考察した。

A地域：1000円以上の地域

B地域：700円以上－1000円未満の地域

C地域：500円以上－700円未満の地域

D地域：500円未満の地域

A地域はおおむね市電の沿線にヒトデ状に分布する。

B地域はA地域の外側にA地域を取り巻いており、特に南部と北部に広く分布するが、西部はA地域をふちどる程度に狭く、東部は国道12号沿線のほかは豊平川が境界となっている。

C地域は桑園と豊平川右岸の平岸、豊平、月寒

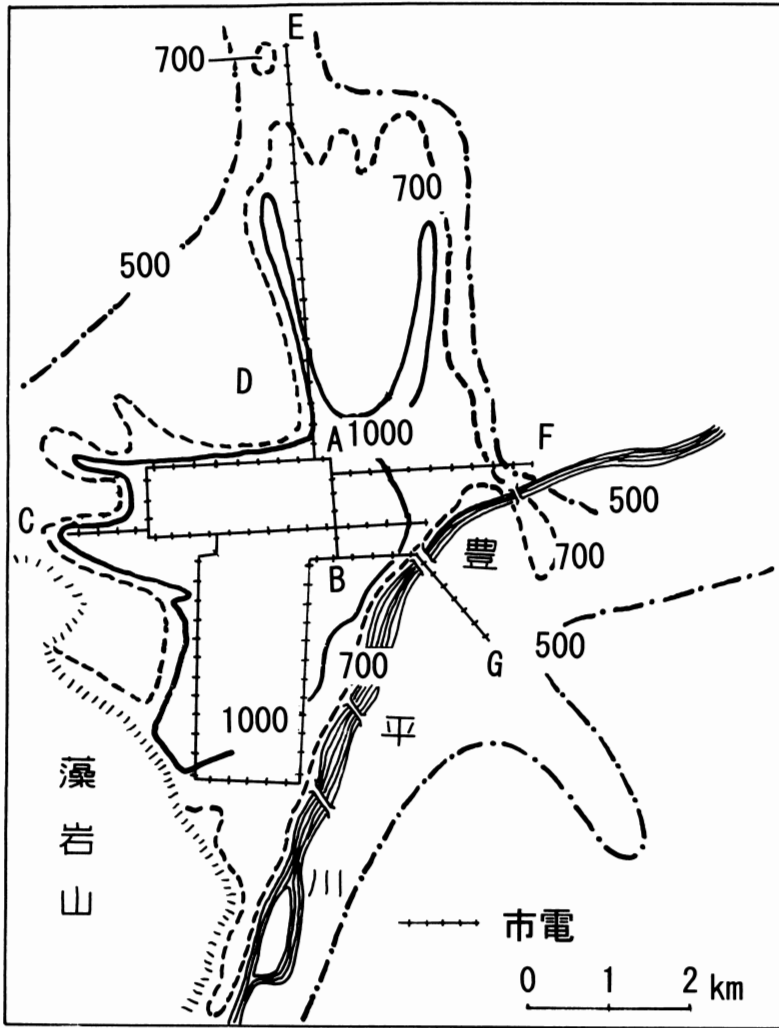


図 札幌市の間代分布図

調査年月 1964年3月～5月

建物はモルタル構造で、部屋に水道が付いているものを対象とした。

数字は1畳あたりの間代に換算したもので、単位は円。

A 札幌駅、B すすきの、C 円山、D 北海道大学、E 麻生、F 苗穂、G 豊平

に広がる。北部では新設市電線の沿線に伸びている。

D地域は西部では琴似川、東部は平岸台地の段丘崖がC地域とD地域をほぼ区切っている。

豊平川を境にB地域とC地域がかなりはっきりと分かれるのは、交通の便のほかに河川が住宅事情に深いつながりをもつことを示している。この図と昭和30年（1955）に札幌市が行った建物評価額の地域的分布とを比べると、3.3平方メートル当

たり1万円以上の評価の土地はA、B地域にそっくりあてはまった。しかし1964年の土地評価額と比較するとA地域の南西部（山鼻地区の南西部）では、同じ年の評価額のところでも間代がすごく違っていた。これはこの9年間の人口増やアパートなどの建設が影響して、ちょっと離れたところでも大きなひらきを生じているのであらうと思われる。

## 結論

間代の地域差は都心までの交通の便や賃貸家屋に対する地域の需給関係を反映している。調査した生徒達は間代分布から人口増や交通網の変化、景気変動などの要素と住宅事情がどう結びついているか。都市において河川が地域差の境界として作用していることを学ぶことをできた。

高校1年生でも都市内部でこのような調査をして客観的データを作成することは難しいことではないように思われる。このような調査の場合、教師があらかじめ調査カードを作成しておいて生徒に配付し、それに調査結果と必要事項を記入させる方法がよいようである。

なお、図は毎日新聞昭和39年6月24日札幌版に掲載されたものである。